気づいたときから変わる生活

沖縄県　豊見城中学校　三年　長濱　佳凛

私はその日、特別に興味があるわけでもないニュースをただなんとなくつけただけだった。しかし途中で、「ＰＦＡＳ・ＰＦＯＡ」に関する特集が流れ始め、私は思わず手を止めて、その内容に引き込まれた。特集では、二〇一六年に沖縄で問題になった汚染が取り上げられていた。嘉手納基地から流れ出したとみられるＰＦＡＳが川に流れ込み、沖縄の水質を悪化させているという内容だった。私はそれを聞き、自分の住んでいる県で水質悪化があると知らずに生活してきたことが驚きだった。そして今、私達が飲んでいる水は安全なのか私は不安を覚えた。

特集の中では、二〇二三年十一月の国際がん研究機関による発表にも触れていた。ＰＦＯＡはそれまで「発がん性の可能性がある」とされていたが、新たに「発がん性がある」と分類されたというのだ。さらに、免疫力の低下や脂質異常症、子どもの出生体重が低くなるなど、さまざまな健康への悪影響も確認されているとあった。なぜそれほど危険性のある物質なのに、どうして世界中で使われ続けているのか。特集はその疑問を投げかけていた。私は目に見えず、においもしない化学物質が私たちの生活に潜んでいることに気づき、恐ろしくなった。安心して飲んでいた水道水が、本当は汚れているかもしれないという可能性に初めて向き合った瞬間だった。

特集を見終えた私は、さらに自分で調べてみたいと思った。検索すると、ＰＦＡＳ・ＰＦＯＡは日常生活に広く使われていることがわかった。「水を弾く」「油が染みない」「焦げつかない」。そんな便利な性質を持つため、レインコートや撥水加工の布、フライパン、食品の包装紙、さらには消化に使われる泡にも利用されているという。私たちの生活を快適にしてきた化学物質だったのだ。しかし同時に、ほとんど壊れないという性質が環境で分解されにくいという問題を生んでいた。川や海に流れ込み、土に染み込んでも分解されず、いつまでも残り続ける。このことからＰＦＡＳは「永遠に残り続ける化学物質」と呼ばれることもあると知った。それでもなぜ使用が止まらないのか。調べると、すぐに健康被害が出るわけではないため、危険性を実感しにくいということも要因の一つだった。さらに、世界中の多くの人がその存在自体を知らず、問題として認識されていないという現実にも気づいた。私は、「知らない」ということの怖さを初めて実感した。今まで自分の生活が安全だと思っていたのは、ただ知らなかっただけではないのかと感じた。

これから私は、自分の生活を一度見直してみようと思った。まずは、毎日飲む水や使う道具について、一度立ち止まって考えることから始めたい。例えば、水道水や飲み水の水質の検査を行ってみたり、必要に応じて浄水器の使用を検討したりすることも、小さな対策の一つだと考えた。また、フライパンや食品容器などの生活必需品を選ぶときに、ＰＦＡＳを使っていない製品があるかや、この商品にはＰＦＡＳが使われているんだなと確認して生活の中に潜むＰＦＡＳを意識してみることもできる。このような行動は生活の中からＰＦＡＳを完全に排除することはできなくても、一人ひとりのＰＦＡＳへの対応が自分の身を自分自身で守れる対策だと感じる。

これから私は、水問題だけでなく、生活の中に隠れた問題にも目を向けていきたいと思う。安心や常識と呼んでいることは決して当たり前なわけではなく、誰かの努力によって守られ続けているものだ。だからこそ私は、情報をただ受け取るだけでなく、自ら知ろうとする姿勢を大切にし、必要なときには行動する人でありたいと感じる。ＰＦＡＳの問題から学んだ気づきと小さな対策を忘れず、これからも自分の暮らしを守るために学ぶ姿勢をもって生きていきたい。